産経新聞

平成２２年９月25日（土）朝刊２４面

関西防災

自然と共生した生活が願い

大阪は古くから水の都と呼ばれてきた。

豊臣秀吉が大阪城を築き、城下町を整備するために、まず東横堀川を掘削し、それをきっかけとして、多くの堀や運河が開削された。

掘った土を低湿地にもり立て、地上げし、市街地をつくるという知恵もあった。船場・島之内地区から始まったこの努力は、江戸時代後期まで継続し、市街地や田畑は約4キロも海側に拡大した。

これらの土地は海抜が低いために、洪水や高潮、そして津波氾濫が起きやすく、この300年間は、これらの災害との戦いの歴史でもあった。

そのため、河川に沿って堤防や護岸が整備され、海岸には防潮堤が建設され、現在の姿となった。また、昭和30年代の経済発展とともに、人工島方式の埋め立ても活発に行われ、南港や北港地区も新たに整備されてきた。

しかしこの間、臨海低平地を中心に地盤沈下が継続し、最大2・8メートルも沈下したところがある。幸い、この沈下は地下水くみ上げ規制が功を奏し、沈静化したが、前述した人工島の場合はあまりにも大規模かつ重量構造物であったため、予想外のことが起こった。

それまで、海底地盤上部の沖積層は沈下するが、その下の洪積層は沈下しないとされてきた。ところが、洪積層が沈下する現象が起こった。関西空港はそれが原因で、沈下を継続している。それがいつごろ沈静化するかは、正確には予測できない。咲洲や舞洲という人工島は今も沈下を継続している。

このようなところに大阪のまちは展開している。

だから、大阪は水に弱いことは、そこで住み、働く人は理解する必要がある。

昨年9月、府は大阪市西区に、津波・高潮ステーションを設置し、水災害に対し大阪が置かれた現状を住民に啓発する事業を開始した。

自然と共生した生活は、私たちの願いである。一方で、自然は時とともに私たちに牙を向けることがある。大阪で起こった昭和の3大高潮災害を忘れてはなるまい。1854年の安政南海地震津波もそうである。1802年には400年に1度の大洪水が淀川で発生し、現在の都島区の毛馬の閘門より西で、大川より北の地域は水没したことが最近の研究で明らかになった。これらの地域は当時は人が住んでいない湿地帯であった。大阪のキタの中心地がすっぽりと含まれる地域である。

災害は繰り返し発生するという特徴をもっている。まだまだ台風シーズンが続くが、かつて大阪を襲った水災害のことが少しでも人々の話題にのぼればと願っている。

（河田惠昭・関西大学社会安全学部長）